
Alice

.りと.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Alice

【Nコード】

N8274R

【作者名】

りと・

【あらすじ】

> 第0章 <

王国軍隊員養成学校に通う、フローラ。
練習はつらいものの、仲のよい、クラリス、ノエリア、ナタリー
と一緒に楽しい日々を送っていた。

その日々が崩れることも知らずに。

舞台設定

必読！！

カロイド王国

・人口、面積ともにそれほど大きな国ではない。

・北の森の面積は国土の約4分の1。北から南に大きな川が流れていて、それに沿って列車が走っている。国の中心部となる城は中心よりもやや西。その周りに城下町があり、さらにその周りには住宅街が広がっている。東側は主に山が多く、農業や酪農を行なっている。南には海が広がっており、漁業などを行っている。

・5つの民族がある（詳しくは民族で）

・他国に頼らない、食べ物、資源などはすべて自国で補っている。というか、農業、漁業、原油なども余るほどあったりする最強な土地。そのせいで他国に狙われることもかなり多い。

・軍隊は、最新兵器から弓などの古来からの武器を使う。20の部隊に分かれていて、それぞれの部隊に隊長がいる。隊長はそれぞれ、実力ベスト20の優秀人材が選ばれる（詳しくは王国軍で）

王国の歴史

民族

・マロン民族

茶色の髪を持つ。王国で一番人口の多い民族。

・ブル民族

青色の髪を持つ。少し控え目だが心優しく、穏やかな人が多い。

・ベルデ民族

緑色の髪を持つ。主に森の中に住んでいる人が多い。動物と話すことができる。最近では、城下町に出て仕事をしたりしている人も多くなっている。

・ジャイロ民族

黄色の髪を持つ。まじめで、大臣や執事、門番などの役割をしている人が多い。

・ビアンコ民族

白色の髪を持つ。王国内でも10人ほどしかいないため、民族といえるかは分からないが、国内では民族として決められている。昔は、神々の末裔や使いとして崇められていた。

王国軍

・実力上位20名が各部隊の隊長として選ばれる。副隊長もその次の20名が選ばれ、基本一年ごとに実力試験があり、それによって決められている。

・各部隊にはほとんど差はないが、A隊が最も優秀であるとされている。

・ 隊員採用は18歳から40歳まで。退隊をしても、その後の働き先は王国が手配してくれるのでほとんど心配はない。

王国軍養成学校

- ・ その名の通り、王国軍隊員を養成するための学校。
- ・ 全寮制（二人部屋）で家に帰ることができるのは1年に2回まで。
- ・ 3歳から通うことができる。
- ・ 15年生までであり、卒業すればほとんどのものが王国軍に入隊することになる。
- ・ 男女比は約2：1で、女子もかなり多い。全校は約450人ほどになる。
- ・ 基本、午前中は普通の学校と同じようなことを学び、午後からはトレーニング特訓、武器の使い方（剣、銃、弓、火薬調合など）を覚えさせられる。
- ・ 個人個人、得意武器があり、それを中心に特訓する。

登場人物

フローラ＝ロム 「Flora＝Lhomme」

王国軍養成学校12年生。ベルデ民族。主に火薬調合とナイフを学ぶ

クラリス＝ヴァン・パリス 「Clarisse＝Van Paris」

12年生。ジャイロ民族。主に大剣を学ぶ。

ノエリア＝クルージエ 「Noelia＝Kruger」

12年生。ビアンコ民族。主に小型銃を学ぶ。

ナタリー＝ギャレー 「Natalie＝Garay」

12年生。マロン民族。主に大剣を学ぶ。

シルヴァン＝レヴィ＝ブリュール 「Sylvain＝Levy - Bruhi」

14年生。カロイド王国王子。主に小型銃、ナイフを学ぶ。

クレマン＝ノディエ 「Clemant＝Nodier」

15年生。ブル民族。主に弓を学ぶ。

ルイ＝アルベル 「Louis＝Albert」

14年生。マロン民族。主に小型銃を学ぶ。

コロ

北の森に住む、大型の老犬。フローラと仲がいい。

シー

北の森に住む、青い鳥。名前は海のような色であることから、フローラが名づけた。

フローラ母

北の森に住んでいる、ベルデ族の一人。夫も娘も外で生活をしているので、ほとんど一人暮らし同然。料理はかなりの腕前。木の実においしさを見極めるのも得意でシーはいつも彼女に頼っている。

「 01 」森の間

「…よいしょ、っと」

私は木に掛けたハンモックから体を起こす。鼻先に木の花がついて、むず痒くなるけどその甘い香りに酔ってしまふ。

「いい香り」

ゆるやかに風が吹いて、木たちがざわめく。

カロイド王国の北の森の春は美しい。こんな風にゆるやかな風が吹き、それに合わせて木々が踊る。また、花の甘い香りもそれに乗って私たちベルデ民族と動物たちの鼻を誘う。

学校の寮生活をしている私も春は必ず帰ると決めている。そもそも帰郷は1年2回までと学校で決まっているのでそう何度も帰るわけにもいかないけど、この回数が少ないとは感じない。学校も楽しいし、この森も大好きだ。

ちなみに私が通っているのは、国立の軍隊員養成学校。全寮制で武器の使い方とか、トレーニングをする。自分の身は自分で守れるようにと両親から言われ、小さい頃から通っているが、私のような女子も少なくない。同い年の女子は10人。私は特に、ルームメイトのナタリーと隣の部屋のクラリス、ノエリアと仲が良い。その3人も今は私と同じように家に帰ってゆっくりしているのだろう。

「あ、コロっ!」

木の根元あたりには、犬のコロがいた。コロは、名前だけ聞けば

小型犬のようだが、立派な大型犬。しかも、私が学校に通い始めた3歳くらいに生まれたから、かなりの老犬だ。

『久しぶりだね。フローラ』

「うん。やっぱり、森はいいね。昼寝が気持ちいい』

『でも、休みでもトレーニングはするんだろっ?』

「まあね」

私たちベルデ民族は動物と話ができる。なぜ話せるのか、それは色んな学者さんが研究しているらしいが未だに分かっていないらしい。私たちにとってはそんなのどうでもいいことだ。同じ森に住むモノ同士、話せるのはこれといって不思議なことではない。

「よつと」

私は地面に飛び降りて、コロを撫でた。コロは気持ちよさそうに鳴いたり、尻尾を振っている。

『フローラ!! フローラ!! 久しぶりなのっ! 今回はどのくらいいられるの?』

バサバサと羽音をたてながらやってきたのは、コロと同じようにこの森に住んでいる、鳥のシー。青色の綺麗な羽根をもつ、元気なやつだ。

「明日…かな」

『えっ!? 早すぎるよお…。まだ全然しゃべってないのっ!』

いつもなら長すぎるくらい休暇をもらうのだが、今回はかりはそうはいかない。

今年は学校創立100周年の日で、色々と準備がある。実力試験

もあるし、家でのんびりする暇はそんなにないのだ。

「ごめんね、シー」

『いや、僕はフローラを応援してるからね。フローラが頑張ってるならそれでいいんだ。な、シー？』

『うん。そうだよな………つて、あー！！！』

何かを思い出したらしい、シーが叫んで、再び羽音をたてて飛び上がる。そして、少し上がったところで、

『あたし、フローラのお母さんにフローラを呼んでくるように言われたんだっ！！ 今すぐ来て！』 と言って、私の背中をせかすようにつついた。少し痛い。

『じゃあ、フローラ。出発する時は教えてね。僕は帰るから』

「うん、またねコロ」

コロはゆつたりと歩いて行った。私もシーと一緒に自分の家に向かった。

new!!

「02」幸せの時間

「いただきます」

シーに連れられて家に帰ると、夕食の準備ができていた。いい香りのするカレーの他に二、三品。どれもおいしいことは食べなくても分かる。お母さんのご飯は、どんなシェフよりも絶品だ。

シーはというと、お母さんがとってきた木の実を食べている。自分でもとりにいけるのに、これを食べるのは、お母さんのとる木の実にはハズレがないからだ。しっかり見極めずにとる、シーには一生良い木の実を見極めることができないだろう。

「父さんはあと2年で軍隊を退隊だから、もしフローラが軍隊入りしても一緒にはできないね」

私のお父さんは、軍隊に入っている。隊長、とまではいかないけど第3隊の副隊長をしている。

なかなか家に帰れない私とお父さんは正直、あんまり会ったことがない。けど、誕生日には毎年プレゼントを寮まで送ってくれる。

私が今まで諦めず、学校での訓練などに耐えられているのは多分お父さんの影響なんじゃないかって思っている。私も軍人になって、戦場に立ってこの国を守りたい。

「ごちそうさまっ！ おいしかったあ…」

私が満足した顔で料理のおいしさの余韻に浸っていると、

「まだあるわよー。フローラの好きなアレが、ね」

私の好きなアレ。

考えなくてもすぐに分かる。この森に広がるチサナの花を加えた、甘い香りのクッキー。小さな頃から毎回家に帰ってくるたびに、お母さんが作ってくれる。

「もう毎回毎回ありがとっ！ うん。いい香り」

私は存分に香りを堪能してから、一つクッキーを取って口に入れた。口の中にもあの甘い香りが広がる。

「今日食べるのは少しにしておきなさいよ。たくさん焼いたから、明日学校まで行く間に食べたり、友達にあげてね」

「んーわかったあ…あまいー。おいしー」

『ずるいー！！ あたしも食べたいっ！』

「シーは食べれませんよー！」

少し厳しくもあり、でも私の好きなことを優先してしてくれたりするお母さんが大好きだった。

いつか崩れてしまっ幸せ

この甘い香りのようにずっとずっと、この幸せが続くんだと思っていた。そう、この時は。

手を伸ばしても掴めない

辛い現実が私を待っていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274r/>

Alice

2011年10月8日22時12分発行